

壹、透徹

「残念ながら、半透徹病です」

若い医師が母娘にそう告げると、娘は難なく受け入れた。

半透徹病。

畸形病の一種で何等かの理由で透明と云う色素が現れ、それが徐々に拡がると云う病である。ほぼ無機質で出来ている骨と、何故か眼球以外がその影響を受ける。それは時に美しく、半透明の身体を作り出す。

「更にお伝えしますと、可成り進行しています。このままでは、肌や血管が透明そのものになり、娘さんは骨と眼球だけの人間になってしまいます。今の時代、確かに私たち医師の世話になることは困難でしょう。ですが、このように私に連絡が取れる立場の貴女であれば、もつと早く対処できたのではないですか？」

若い医師は、母親を責めるように云う。

この病の悪化原因については心当たりがある。更に云えば、云い返さない母親はきつと凶星なのだろう。

若い医師は続ける。——溜息を吐きたい気分だ。

「治療法は薬に因る色付けが主な処置になります。治療費は腕一本」

この医師は、畸形児専門の医師であり、今の時代彼しか居ないと云つても過言ではない。だ

が、彼は治療費に金銭ではなくその体の一部を要求するのだ。勿論、それが嫌なのであれば断れば良いし、または更なる高額な金銭を払えば良い。

然し、この母親はそのようなことをしない。娘の腕一本を、透明の体と引き換えに渡すのだ。交渉すらしめない。——娘も、受け入れている。

そう、今の世の中では、四肢が欠損してでも、生きながらえることを選択する人々は存外多いのだ。病とは何か、どうしたら治るのか——良く解らないのである。

「私が好き時に、切り落とします。万が一にも治らなかつた場合、二十万を御支払い致します。宜しいですね？」

母娘は頷いた。

娘は——若い医師を見つめて微笑んだ。

まるで彼が彼女を救ってくれることを信じているかのように。



「只今帰りました」

若い医師はやや立派な家宅へ入って行った。中からは「嗚呼、御帰り」と男の声が迎える。居間や薬の調合室等を含め、部屋は全部で十部屋。現在入室患者は居ない。

若い医師はその声の主が何時もの通りに玄関から入って直ぐの居室の囲炉裏の傍に座って居

ると予想したが、声の主の着物が、小さな人の形に不自然に浮かんでいるのを発見しただけだった。

——事情が飲み込めない。

「葉朗さん、良い加減にして下さい」

何が起こっているのか解らないが、取り敢えず若い医師はそう云った。声の主はこの家に共に住む人物であり、名を神酒葉朗と云う。この家の主人である。

彼は人を押揶する事が趣味だと云う中々困った性格の持ち主だ。若い医師は原理を理解することが出来なかつたがその趣味の一貫だと思つた。

そしてそれは予想に反した。

「よーさん、なあに？ このひとー」

「はい？」

葉朗の着物が喋る。思わず奇妙な声を上げてしまった。

「ああ。それは名を妙と云つてだな。中々に面白い人間だぞ」

着物の中身が別の着物を着て、台所から顔を出し、いつもと変わらぬ笑顔で相変わらざるの憎まれ口を叩く。

妙と着物に紹介された若い医師は葉朗に尋ねた。

「何のですか……」

化かされた気分だ。「何の積もりなのですか」と再び尋ねる。

葉朗は笑いを絶やさず——尤も、常に笑いは絶やさないのだが——応えた。

「お前が飲む者だよ」

不機嫌そうな表情だった妙は表情を変える——。

「真逆……否、そんな筈……」

戸惑いと歓喜の表情。そして声を発する。

「完全透徹病——？」

思わず、笑む。不謹慎だと自覚は有るが。

「この時代に、本当なのですか」

「眼の前に居るそれは視覚出来ないだろうか？ 然し、存在は認識出来るだろうか？」

「ええ」と応えて妙は頭であろう場所に手を遣り、撫でた。思ったより、小さかった。

「葉朗さん、この仔は何処で？ それと、幾つですか？」

「五歳位だと云っていたな。こいつは服も着ずに歩いていたら。……思わず拾ってきた。俺

にぶつかって来たんだ」

葉朗はそう云って着物を抱き上げた。

「こいつは存在を否定されていたんだ。……俺達の様にな」

きやははと着物は笑う。内容は理解していないだろう。何しろ幼い。妙は歓喜立った表情を押し殺して着物に尋ねた。

「名は？」

「名は？」

「謀だよ。よーさん、たかいたかいてー」

声からして恐らく少女だろう。随分葉朗に懐いている。

葉朗は「俺にはそんな力なんてないよ」などと云い、抱き上げた謀を座布団の上に下ろして隣に自分も腰を下ろした。

妙も葉郎の向かいに腰を下ろし、医療器具の詰まった鞆を隣に置いた。

「そう云えば妙」

「はい」

「今回の患者は？」

仕事の話だ。神妙な顔付きになる。

「ええ、患者の名は東叙縹とうじょまづな、十七歳の少女です。半透徹病が可也悪化していました。治療は薬

の投与です。悪化原因は……また、白雪姫君しらゆきのみめさまでした」

遣る瀬無い、と云った声で妙は報告を締め括った。

「白雪姫君、ねえ」

又か、と云わんばかりの葉朗に謀が「何それ」と尋ねる。

「ふむ」

葉朗は面倒臭そうに謀を、否着物を見詰めて、更に溜息のような一息を吐いて妙を一層の笑顔で見た。

「妙に聞くと良い。俺は散歩に行くと云う用事が出来て仕舞った」

「はい」

「え……」

止める間も無く、葉朗は立ち上がって玄關へと行って仕舞った。カッンと下駄を履いて外へと足音は去って行く。

無音が残る。

膝元を見ると謀が話を要求している——ようだ。

確かに、説明することは面倒だろう。だが、散歩に行く用事とは何なのだ。別に簡単なことなのだから良いではないか、と心の中で一頻り文句を云ってみるが、無意味なのでやめた。

「仕方無いですね……」

妙は少々億劫そうに話し始めた。

「昔々、或る所に一人の少女が居ました。その少女は大変美しく、然し大変貧しかったのです。貧しい層には畸病が流行るモノです。少女も畸病に取り憑かれました。貴女と同じ、透徹の病ですね。唯でさえ貧しいのに勿論医師に掛かれません。」

——そう。当時は未だ医療は禁術ではなかったのですよ。

そうして少女の肌は段々薄くなり、奇妙になります。然し、です。元々、透徹は遺伝病の一種で劣性の遺伝子なので、偶々良くある透徹病程薄くは成らなかったのです。そう、文字通り、透き通る様な肌の少女の出来上がりです。

そうして少女はその透き通る様な肌と元々の美しさに因つて大名様に見初められ、家族や親戚共々幸せに成れたのです。その時少女は名を「白雪しらゆき」と改め、そしてまた、その後も幾度か——

本当に余り無い事です——透徹病に因つて見初められた方は「白雪」と改名したのです。ですから、今でもそう云う事態が偶にあり、娘が白雪に成れるかと希望を抱き、医師——と云つても今の時代、私が知る限り私か葉朗さんしか居ないのですが——に診せる事が遅くなる

と云う事態が多々有るのです」

と、妙が喋り終え、一息吐いてから云う。

「——と云う話ですが。謀のような幼児に解るものでしょうか」

一応、謀は「ふうん」と呼応するように呟いた。

葉朗には決して云えないが、妙は謀のこの病を治したいとは別段思ひはしなかつた。寧ろ

——この姿で死してそしてその遺体が欲しい。

完全透徹の病。

葉朗が拾つて来たと言ふのなら葉朗の患者だろう。

葉朗の患者であると言ふ事は干渉が出来ないだろう。

詰まり、何も貰えないと言ふ事だ。

何と惜しい事だろうか。

何と悔しい事だろうか。

何と残念な事だろうか。

腕一本だけでも。
足一本だけでも。

頭が欲しいとは云わぬから。

妙は愛しい完全透徹の人間を見ながら夢想する。

この完全透徹の人間を丸ごとホルマリン漬けにして、そしてあの半透徹の患者を剥製にして、自らの「蝶塚」に飾るのだ。なんと甘美な光景なのだろう！

透徹なる彼女の頭を撫ぜると、見えないが正しくそこに存在することが解る。

それがとても愛しく、そしてそれが人体であると云うことがとても不思議でならない。更には、この美しき透徹の君を、奇妙だと忌避する人々の存在も。

人体は美しいのだ。特に、畸形に魅入られた人々の人体は。

だからこそ、妙のように――。

「あ、よーさんが帰ってきた」

大分思案に耽つてしまつていたようだ。

珍しい完全透徹の病が近くにいることで高揚していた妙は、謀のその言葉で現実へ戻つてくる。

謀が妙の近くから立ち上がり、玄関の方へ走つて行つた。

見えないが着物が肌けて落ちてしまったので、妙は慌てて謀を抱き上げて着物を纏わせる。それでも、玄関に行くことを止めないので、仕方なく謀を持ち上げて玄関へ向かった。

そして、そこで視界に入ってきたのは女兒用の着物を持った葉朗だった。

その違和感のある光景に、妙は思わず呟いてしまう。

「葉朗さんに女兒の服を選ぶ気遣いがあつたとは」

云つて気付いた。嗚呼、後が怖いと。無言の笑顔で威嚇されている。笑顔にも種類があるのだと不謹慎ながらも思う。

「洗濯物を取り込んで夕飯の用意を早くしろ。戸締りをしっかりな。今日は冷え込むぞ」

そして特に言葉では何も表さない事が更に恐怖を煽るのだ。

「……畏まりました」

この様な時は素直に従う事が最善である。

突つ掛けを履いて庭に出る。本当に今日は冷え込みますね——と独り言を云いながら洗濯物を仕舞い込む。空は冷え冷えと青く綺麗だった。垣根も随分寒そうだと思ひ、異常植物群は人間と同じ様に寒さを感じるのだろうか、それとも植物と同じ様に感じるのだろうかと思考した。

この家の中庭にも、異常植物群の一種が生えているのだ。

「妙」

背後で雨戸を閉めるガラガラと云う音と葉朗の声が聞こえた。

「何を呆ぼうつと何をしている、早く中に入れ、締め切るぞ」

はい、と云つて妙は駆け足で家にながり込む。家に入ると、元気な声が響き渡つた。

「みよんッ！ 見てみて！」

みよんとは己の事か——と解釈してから、妙は謀のその言葉に答える。

「はああ、似合うじゃないですか」

先ほど散歩から帰つてきた葉朗が持つていた服を謀が着ているのである。非常に可愛らしい女児用の赤い服である。似合うと云つても謀の姿は見得ないのだが謀の印象にはびつたりだと思ふのだ。——だが然し、この着物を葉朗が買つている所を思うと矢張り笑いが込み上げて来た。

「さて、謀。夕飯の支度の手伝いでもしますか？」

「うん！」と元気良く謀は返事をする。葉朗は穏やかな笑みでそれを見、そして云う。

「では俺は自室で調べ物をしているよ。それと」振り向く。「明日で良いから鎖雲さくもに連絡を取つてくれ」

「森下もりもとさんに用ですか？」

「嗚呼」

葉朗は呻くようにそう呟き、声を響めて云う。「幾らお前でも治すな、とは云わぬだろ

う？」

「……ええ。口出し致しませんよ、勿論。私が最終的に欲しい物はこの世で唯一つの脳の人工

畸型きけいである、貴方のそれ——ですから」

「なら良い」

満足まんじつ気な笑みを残して葉朗は書室に向かう廊下を歩いた。

畸型兒きけいじ蒐集家じゅうしゅうか——。

畸型兒の事を俗に蝶と云い、そして畸型兒を飾る場を蝶塚と云う。妙はこの蝶を蒐集する事を趣味とする人間なのだ。否、それはもう性癖と云つても良いのかも知れない。蝶に関する執着は他に類を見ない。葉朗の脳を欲するのもそうだ。恩は有れど恨みは無い。然し蒐集家の狂った気質はその恩すらも凌駕する。医師として仕事をするのも蝶を入手する為の手段にしか過ぎないし、葉朗もそれを嫌々ながらも承諾している。また、それは妙が葉朗の後継者になる時の約束でもあった。

そう、妙は望んで医師として居る訳ではないのだ。

葉朗が去つた空間には、妙と可愛らしい着物に包まれた謀が残された。

「みよん、どうしたの？」

あどけなくそう問う謀の声に我に返る。

どうも今日は不可いけない。色々と考えすぎている。

「いいえ、大丈夫です。さて、お台所へ行きましょう。お夕飯を作らなければ」

妙は謀とともに台所へ移動し、いつもの様に料理を作る。——とは云え、今日は謀がいるのでいつもの様にはいかない。謀は、まるで何も知らない様に料理器具を扱う。——否、きつ

と、本当に何も知らないのだろう。透徹の体で、一体彼女はどのような扱いを受けてきたのだろうか。

——それでも。それでも元気に明るい彼女に妙は惹かれている。——そう、蒐集物として。自分の蝶塚に、謀を飾りたい。そんな欲求が押し寄せてくる。だが、それはできない。彼女は葉朗の患者なのだから。

そう考えながらも妙は、一生懸命に手伝いをしてくれる微笑ましい謀とともに夕飯の支度をしていく。

「さあ、出来上がりました。葉朗さんを迎えに行つて下さい」

「はい」

妙は、「よーさん！」と叫んで走つて行く謀を見ながら食事を運んで行く。嗚呼。愛着が湧けば湧く程、蒐集物に加えたい欲求が大きく成つて行く。

可愛い。珍しい。だから自分の物に。觀賞用に——。

夕飯を食べている間も、妙はずっと、自分の蝶塚のことを考えていた。

飯を食い終わり片付けをしていると、葉朗は傍を横切りながら「疲れてる様だな」と洩らした。疲れている訳ではないと思う。今日一日で、半透徹の病と、完全透徹の病の患者に会つて、きつと高揚しているのだろう。だが、氣遣つてもらふことは有難い。

「有難う御座居ます。でも、大丈夫ですよ。私はこれから薬の調合に向いますね。調合室をお

借りします」

「そうか。無理はするなよ」

葉朗はそれだけを云って微笑んだ。

赤 橙 黄 緑 青 藍 紫

広い家宅の一室。可視光線の波長の長さに合わせて調合する。

ゴリゴリゴリ……

播鉢と播粉木の音も混ざる

やがてインクの粉は滑らかになる

サラサラサラ……

インクは水に溶解する

虹色の水

凡てを吸収する、反射する

コブコブコブ……

器に水が満たされる

凡ての工程を終えて一息吐くと、葉朗が障子を引いて入ってきた。

「何用でしょうか」

葉朗は調合されている薬をちらりと見、また辺りを見回してから、静かに、息を吐く様に云った。

「俺は謀を治すんだぞ。……止めないのか」

「止めても無駄でしょう。それに今迄の流れから云ってそうでしょう。何を今更」

少し機嫌を害した様な態度になって仕舞ったと自覚しながら云った。決してわざとではな

い。葉朗は恐らく妙が反論すると思っていたのであろう、そしてそれが無いので問い質して来たのだらう。

葉朗も一種の蒐集家である。その狂った氣質が解らないでもない。

稀有な蒐集物になり得るものが近くにあるのに、それを欲しがらないことが不審だ。

そして、妙は望んで医師として居るわけではないが、葉朗は純粹に正しく医師である。患者を治すことは義務だと考える。

「謀が着物を着ていなかったのは存在を無いと認識する為に親が云った事だろう。事実母親に着るなと云われていたらしい。だから」

過去の医術を学び、そしてそれは今や禁術である。又、二人が使用する刀にしてもそうだ。それらに因つて妙も葉朗も忌み嫌われている。それでも二人が医師として存在しているのは矢張り——結局医師は必要とされるからだだろう。特に、医師は要らぬと云つた高位な人間達に。

明治の世に入つたと同時に医術は禁止された。他にも色々法が出来たらしいが余り庶民には関係がなさそうだった。それらの改革を明治維新と云つたか。

——自然に逆らうな。

それが新たな政府の云い分らしかつた。

「俺達の境遇に」一旦切つて「妙は俺の所為だな」と云う。「重なるんだ。自己満足だよ」

「でしようね」

「ふん。解つて貰えて光栄だね。じゃあ、お休み」

「ええ。私ももう休ませていただきます。お休みなさい」